発問例

●一九九ページ

問 **「いかにも静かな感じを与えた。寂しかった。」（6 行目）に述べられている「静かさ」と「寂しさ」が指す内容上の相違点を説明しなさい。**

答 「静かさ」は死そのもののイメージ、「寂しさ」は【死骸】を【生きているもの】と比較したときに抱いた感情を指す。

補 「静かさ」は死そのものがもつ普遍的、絶対的な永遠性を想起したときに生じる穏やかな心情を指す。それに対して「寂しさ」は【死骸】と【生きているもの】の物質的な対比から感じる生から死への変遷、ひいては自己消失に対する落ち着かない心情を指す。

この問より先に、一九九ページ 12 行目での「死んだ蜂」の捉え方についての発問を考えると、この問もわかりやすくなる。

問 **「そこ」（10 行目）とは、どこを指しているか。本文中から抜き出しなさい。**

答 玄関の屋根

問 **「外界にそれを動かす次の変化が起こるまでは」（12 行目）という表現から、「死んだ蜂」をどのような存在として捉えていることがうかがわれるか。**

答 自らは動くことのない不動・不変の静かな存在。

問 **「その静かさに親しみを感じた。」（15 行目）とあるが、この親しみは何に対する親しみか。**

答 「死」の静かさ。

補 第一段の終末の「何かしら死に対する親しみ」（一九八・7）と対応させて考える。

問 **◉「いかにも」という語の多用には、どのような効果があるか。**

答 蜂の生死について、作者の感じ方をそれ以外のことはないという程度まで強調している。生と死を際立たせ、また、一種のリズム感を生じさせている。

補 ただし、「いかにも」とは、まさにそのようだということである。前後の説明は簡潔で、詳細に説明しないことでかえって、読者ごとに異なる想像を許容しながら、主人公との感慨の共有を促す表現だと言える。

●二〇〇ページ

問 **「それを助長し」（2 行目）が指す言葉を本文中から探しなさい。**

答 嫉妬。

問 **「「殺されたる范の妻」を書こうと思った」（5 行目）とあるが、ここで自分が思った気持ちはどのような気持ちか説明しなさい。**

答 范に殺されて墓の下にいる范の妻の死骸から想起される「静か」な気持ち。

補 「青山の土の下」にある祖父や母の死骸との重なり合いも併せて教授したい。

問 **「自分は『范の犯罪』という」（一九九・16）～「気持だったので弱った。」（二〇〇・9）という文章が蜂の文章の後に描かれることに主人公のどのような変化を見て取れるか。**

答 死骸から死のイメージを想起する主人公が、単に静かさに親しみを感じているだけの状態から一歩踏み込み、その親しみを積極的に表現したいと考えるようになったことが読み取れる。

語句の研究

●一九八ページ

15 欄干　ここでは、旅館の二階の部屋にある縁側の手すり。

16 死んでいるのを見つけた。　主人公は生きている蜂を「眺めていた」のに対して、死んでいる蜂は「見つけ」ている。生に対しては受動的な視線でとらえているが、死に対しては能動的な視線でとらえていると考えることもできるし、また、【P 一九七での簡単に見つかる「やまめ」】／【「なおよく見る」と見つかる「川がに」】という対比に落とし込むことや、「祖父や母の死骸」から死のイメージを想起することを繰り返していると理解することもできよう。いずれにせよ蜂の死骸を「見つける」ことで、

死そのものの永続性・普遍性に親しみを覚えるようになっていくことは押さえておきたい。

●一九九ページ

2 拘泥する様子はなかった。　擬人法でハチの行動を表現している。前文「冷淡だった。」と同様、主人公の心情が強く反映される表現技法である。

6 いかにも死んだものという感じ　蜂は既に「死んだもの」であり、したがって、この場合、死は完了した形で存在する。その点が、後のねずみやいもりとは違っている。

12 外界にそれを動かす次の変化が起こるまでは　雨が降るか、風が吹くかして初めて蜂の死骸は移動する。死んだ蜂自体は自分では動かず、他のものに影響も与えもしない。この没交渉という点で「青山の土の下」にいる「祖父や母の死骸」（ないしは想像上の自分の死骸）と蜂の死骸を並べて考えることも可能であろう。

14 それにしろ、それはいかにも静かであった。　「それにしろ」の「それ」は死骸がありに引かれていくことを指す。「しろ」はサ変・命令形であるが、この場合は、軽い仮定を示す。「それはいかにも」の「それ」は死骸を指す。ありに引かれて動かされ、食い散らかされる死骸がなぜ静かなのか。ここは実際に見つけた死骸から想起した「死のイメージ」の静かさがあるのである。引かれても、食われても死は不変・不動。永遠の静なのである。

キー・ポイント　蜂の描写に見られる「寂しさ」と「静かさ」の違い　「寂しさ」は【生きているもの】の対として【死んでいるもの】を捉えたときに生じた主観。すなわち他の事物に影響を与えられず、ただそこに存在することしかできない、外界との没交渉性に起因する心情である。一方で「静かさ」は死そのもののイメージである。「三日ほどそのままになっていた」（一九九・5）という事実から、死の不変性・不動性を時間の連続上において捉えている。永遠にあり続けるというイメージから発した穏やかな感じである。

16 その少し前　蜂の死骸を見る前。一九六・10に「読むか書くか」とあり、このことを指すととらえることもできるし、城崎温泉滞在以前ととらえることもできる、解釈に揺れのある表記である。なお志賀直哉が「范の犯罪」を書いたのは初出の「白樺」紙上によれば大正二（一九一三）年九月二十四日のこととされており、これは城崎温泉滞在（同年十月十八日より）以前のことである。

●二〇〇ページ

2 それを助長　「それ」は「嫉妬」を指す。大正時代前後では、精神／身体の二項を精神／生理と表現することも多かった。范にとって「嫉妬」は心理的、「生理的」は身体的な殺害の要因となっている。

3 その静かさを書きたい　范に殺され墓の下にいる妻の死骸から想起する静かさを書きたい。蜂の死骸から「静かさに親しみを感じた」後にこのエピソードが書かれており、妻の死骸と蜂の死骸（あるいは祖父や母の死骸）が同列のものとして並べられている。一九八・7で感じていた「何かしら」の親しみが、蜂の死骸を見つけたことで、言語化したいという欲求が現れるほどに具体化されたともいえる。

注意する語句

調える…望ましい状態に戻す。ととのえる。

＊食事の支度を調える。

（＊で用例を示した）